

どっかい生きてます!



冬晴れの12月7日、潮騒デイケアで生活する仲間たち約30人が農業隊が活躍する青塚農場でサツマイモの収穫に励みました。収穫したのは紅はるかという品種で、甘みが強くスイーツ向きのイモです。収穫して2~3週間置くと一層甘みが増します。潮騒では今年から焼きイモにチャレンジするほか、人気の干しイモにも使う予定で、この日は、一畝が120mほどあるサツマイモ畑に参加者が5列になって手で掘り起こし、約2時間ほどで作業を終えました。中には腰が痛くなったメンバーもいましたが、心地よい汗を流しました。

2015

12

2015 年を振り返って ～スタッフの成長は来年に繋がる



今年も残りわずかとなり、1 年を振り返る時期となりました。有難いのは、ここに来てスタッフが育ってきたことです。潮騒 JTC やダルクは欧米に普及している「治療共同体」がモデルです。これを日本の風土に合うよう改良した、柔軟な運営を身上とする社会との中間施設です。今ではダルクも関連施設が全国各地に増えてスタイルも多様化し、いろんな「顔」や「形」を持つようになりました。でも、依存症の当事者による自助活動が基本であることには変わりはありません。なので精神科医や心理カウンセラー、福祉や医療のワーカーなど専門職はいません。いずれも上下・支配関係のないフラットな立場こそが回復を支える、という信念と実戦経験に基づいて運営されています。

そこで一番大事なのは、同じ病気を持つ仲間の存在です。スタッフは一足早く回復の道を歩む「先行く仲間」ですが、自らが回復している姿を示すことで新入りには重要な「生きる手本」となり、気持ちが通じ合うリカバリング・スタッフとして重要な援助者となります。でも、私を含めスタッフの労働環境が恵まれているとは、お世辞にも言えません。様に厳しい条件の中で、与えられた任務をこなしています。公的支援のある福祉施設のように、給料や福利厚生、社会的な身分保障がきちんとされています。どこも貧しい台所事情だけに綱渡りの運営を強いられ、スタッフは不安的なボランティアの位置づけで成り立っています。いわば志ある善意のチャリティー精神に支えられているのが実態です。

本来、潮騒 JTC やダルクは「通過施設」であり、新旧入寮者が一定の流れで循環していることが望ましいのです。しかし、現実には地域社会における依存症への理解遅れや就労環境の未整備などから、入寮者の施設内での滞留化が加速し、高齢化が一段と激しくなっています。その上、困った事に施設内で回復プログラムに取り組んで自己改善を図ろうとする基本姿勢が、一部入寮者にとても弱くなっています。これがリハビリ＆就労支援施設としての潮騒 JTC の運営を危うくしています。彼らは一方的に施設への不平不満を増幅させ、「潮騒に在ると一生社会に出られなくなる」「潮騒には回復者なんか一人もいない」など根拠のない噂話で施設運営を揺さぶります。そのため以前のようにシンプルな施設運営ができにくくなっているのは確かです。

でも、そうした困難な状況下でスタッフが育ってくれているのは朗報です。特に今年は 10 周年記念フォーラムなどで超多忙な施設運営を強いられました。スタッフは精神的にも肉体的にも疲労が蓄積しています。でも不思議な事に、潮騒 JTC ではこうした逆境がスタッフや仲間たちに絶望ではなく、回復への希望をもたらしています。なぜそうなるのか、回復のメカニズムは理屈ではとても表現できません。そこはまさに、私たちが信じる神様の領域です。この新たな人的資源を大事な財産として生かしながら、来年はさらに潮騒 JTC を飛躍させたいと考えています。

(センター長 栗原 豊)



おらげのかまどオープン1周年記念対談 栗原センター長 VS ハル店長

潮騒 JTC の直営食堂「おらげのかまど」が昨年11月11日に、鹿嶋市鉢形の鹿嶋市役所前にオープンしてから1年がたちました。そこで栗原豊センター長と、店の運営を任された店長のハルさんに対談をしてもらい、この1年を振り返っての感想や反省点、今後の課題などを話し合ってもらいました。(司会・広報部)

センター長の妄想に付き合って 1年やってこられた

——まず、お二人に1周年の感想について伺います。

栗原 あっという間の1年だったかな。就労支援を絡ませた自前の食堂を持つのは私が思い描く「アディクシオンビレッジ構想」の一つだから、いつかはやろうと決めていた。昨年春に運よくチャンスが訪れたので準備に入り、潮騒のマンパワーを生かして改装工事の多くを手掛け、なんとか11月にはスタートできた。もともと私は計画性や見通しがあって事を起こすタイプじゃないし、所詮は依存症者の無謀な挑戦にしか見られないのがオチだから、世間の評価や顔色を気にしていたら取り組めなかったと思う。

——結果オーライという感じですか？

栗原 そうだね。決していい条件じゃなかったが、やれそうな物件が見つかった。でも建物内部の痛みが激しく、予想よりも初期投資がかさんだけど。なんとか器

を造り、方向性は示せたかなと思う。あとは仏にどう魂を入れるか、経営はハル店長にお任せだから、人知れず店長の苦労は多かっただろうな。

ハル 私からすればセンター長の妄想は分かっていたから、これに付き合う感じでなんとか1年やってこられた。料理人として自分の経験が潮騒でも十分に生かせることを実証できた。この1年で店もなんとか軌道に乗ってきたかな、と思う。テストケースかもしれないが、仲間の支えがあれば回復施設でも自前の飲食店がやれることの先駆けにしたい。

——ダルクは全国各地に増えたが、自分たちで食堂をやろうという動きにはなかなか行き着かない。センター長があえて挑んだきっかけは？

栗原 まず潮騒が100人を超える大所帯になって食事環境に多様なニーズが出てきた。みんな外注の弁当にも飽きて、たまには外食したい、美味しい食事をしたい、という声が私の耳にも届いていた。外注弁当の経費はバカにならないのに、不満は根強くなるばかり…、何とかしたいと考えた。そこで思い立ったのは潮騒のマンパワー。そういえばウチには優れた腕を持つ元料理人が何人かいる。この人材を生かさない手はないだろう、と。うまくやれば潮騒独自の就労支援の形にも繋がる。そういう計算も働いた。だから始めるに当たっては、真っ先にハルさんの存在が頭に浮かんだ。

今は入寮者に 利用してもらわないと成り立たない

ハル 私は潮騒を円満卒業して一度、社会に出て失敗している。その経験から、中途半端な回復では一般の飲食店で仕事を続けるには難があることが身を持って分かった。だから、もしかして潮騒が掲げる「半就労半福祉」の環境ならば、アディクトとして再チャレンジできるかもしれない、と考えた。だからセンター長の英断には感謝している。かまどは社会に向いた店だから、自分の病気(=アルコール依存症)に甘える事なく、適度な緊張感を持って世間の厳しさを肌で感じながら、自分の得意料理で勝負できるのがいい。

—— かまどには、就労支援を基本にしながらも、潮騒農場で穫れた野菜や米を食材にして健康食を一般客に提供しようという狙いもある。将来は商業的な自立も視野に入れているが…。

栗原 どうしたら地元のお客さんが入ってくれるか、その事だけはいつも考えている。一般客の利用が少ないのが課題だけど、採算ベースに乗るにはどうしたって時間が掛かる。保険を掛ける訳ではないけど、今の段階では入寮者にも利用してもらわないと成り立たない。逆に入寮者からすれば、施設生活における一番の楽しみは食べることだから、ハル店長が作ったおいしくてヘルシーなメニューを自分で好きを選んで食べられるスタイルは、入寮者にとっても有難いはず。農場と連携した流れがうまく循環していけば、私が思い描く自給自足型の施設運営にも繋がる。

—— この1年やってみて問題点や課題も見えてきた？

ハル 仲間の利用がなかったら1年なんて持たなかったと思う。普通の店なら、とっくにギブアップしていた。かまどは施設の一部として活動できているので、この形で無理なく続けていければいい。ただ、センター長が懸念するように一般客と入寮者のバッティングはさせたくない。潮騒は人数も多いし、どうしても仲間意識が反映されて、アディクト独特の雰囲気や違和感を店内に形成してしまう。その結果、一般客が敬遠して入りづらくなっている感じは否めない。

栗原 それで今回、かまどに隣接する直売所の内装を変えて入寮者専用の食堂にした。うちにはラーメンが得意なメンバーもいるので、ラーメン店としても使えるように手直ししたい。荒れた土地でもそばは作れるから、かまどに隣接して手打ちそばの教室にもチャレンジしたい。

商売にならなくても、それで地元への恩返しをしたい…。私の悪い癖で、そんな風に妄想がどんどん膨らんでしまう。

ハル店長の魚料理はうまく 一品料理はお袋の味

—— センター長の立場からみた具体的な課題は？

栗原 さっきも言ったけど、潮騒農場との連携が今一つに見える。農業隊も頑張っているが、まだまだ素人農業だ。通年で農産物を安定的に供給できるまでは至っていない。看板の青パパイヤも食材に使うとなると馴染みが薄いせいか、あるいは食材としての個性が引き出しにくいのか、一般客の関心と呼び込めるまでにはなっていない。ハル店長から農場にもっと注文を出してほしい。

—— では店長、メニューの構成などで苦労は。

ハル 私は直接、市場や業務スーパーに買い出しに出向き、安全性に気を遣いながら自分の目で、その日に使う新鮮な食材を選んでいる。結果、どうしても得意な魚料理や野菜料理にウェイトを置く傾向になっているかもしれない。赤字にならないようにバランスをとるのが大変だけど、お客さんからはそれなりに評価を頂いています。

栗原 確かにハル店長の魚料理はうまい。一品料理や小鉢ものもお袋の味を思わせる。豚丼は人気メニューだな、ラーメンもネットでそこそこの評価を得ているようだね。欲を言えば、もう少し早くお客に出してもらえれば、さらに評価が上がると思う。

ハル 今は提案されたアイデアをできるだけ受け入れている。問題が起これば1つ1つ解決していくしかない。そういうことで店がつくれている。自分からこういうイメージでということよりも、周りからの提案や意見を受けて入れてイメージを固めている段階かな。気持ちはすごく楽ですね。食べ物を提供する仕事だから忙しい思いはしているけど、気持ちは楽にいられます。

—— それなりに手応えを得ている感じですね。この先、店づくりで何か考えは？

ハル 少しずつリピーター客も増えてきた。目の前の市役所の人で来店する人も増えているけど、もっと昼食弁当の注文を増やしたいな。先の話だけど、コンスタントに30個ぐらいの弁当を受注できるようになればいいなあ。

栗原 なかなか地域の利用者が増えなかったが、1年たってやっとぼちぼち増えてきた感じだね。こわごわのぞいていたお客がすんなり入れるようになってきた。それなりに店の雰囲気が作られてきたのかな？

ヤバいと思ったら 仲間に助けを求めてほしい

——課題と言えば厨房スタッフのリタイアがあった。その半面、女性メンバーの接客スキルや調理補助の腕前が向上してきたとも聞かす。

ハル 私のリーダーシップの問題もあるのかもしれないが、仲間であつても人に技術を教えるのは簡単じゃない。それはどこの世界も同じでしょう。アディクトなら、なお一層難しい面がある。そこのところは今後の課題です。私にとっての回復とともに、スタッフが定着できるよう地道に取り組むしかない。

栗原 確かに難しい課題だな。社会に出られるかは別にして、私としては自立に向けてかまどに関わったメンバーにはなんとか自信を持たせたい。それはハル店長の腕に掛かっている。そう言う、ますますプレッシャーになるかな。でも、とりあえずの成功に終わらせず、頑張つて就労支援の一つの形につながるよう模索してほしい。

——依存症の実態を知らないが人からすると、目の前に手本となる人物がいて、ある程度の環境が整えば、自分もあなりたいという動機付けが高まる、と安易に考えがちだ。でも、私達を取り巻く現実はその簡単ではない。アディクトだって生身の人間だから、人間関係での葛藤や悩み、対立も生まれる。うまくいかない時にどう活路を見出すか？

栗原 うまくいかないのは、やはり病気が重いせいかな。でも、仲間の中には「俺もかまどで働かせてくれ!」という者も現れている。これなどはいいい方向の流れだろう。食事に来ているだけでも、一部入寮者にそういう傾向が出ている。

——1年の成果を踏まえて依存症の回復と就労支援で何か仲間への助言を。

ハル 自分の経験を踏まえて言えば施設で回復したとしても、社会に出るといろいろな形で自分の病気が出てしまう。表面的にはなおったように見えても、根本ではなおっていない。用心していても病気は出てしまう。私は幸い早めに気づけた方だと思う。ヤバいと思ったら仲間に助けを求めてほしい。私はそうしてセンター長に助けられた。助けを求めることは何ら恥ではない。私が潮騒に戻ったのは、まさしく神様の計画。なんてタイミングよく計画に嵌ったんだろうと感謝している。

栗原 すごくいいメッセージだね。依存症は一生治らない病気、油断すれば出ちゃうんだ、と。1回だけの「底つ

き」で回復に向かうなら話は簡単。依存症の回復へのステージはそんなに甘いもんじゃない。何度か神様は私達を試そうとする。そのことを踏まえた就労支援が大事だということ。焦らずに、のんびりやっていこう。

潮騒がやっている店だと 理解した上で来店を

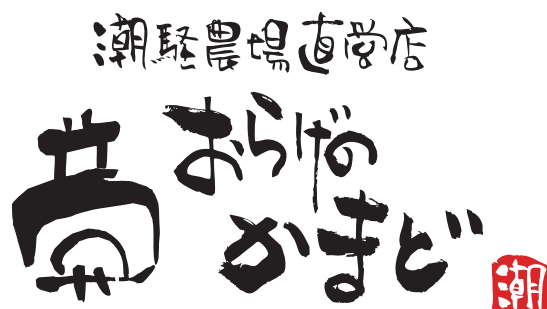
——ダルクの多くは、病気の再発要因につながるとして過去の職業に戻ることを否定的に見ているが、潮騒では生かす方向。これについては？

ハル 僕もそれは気になっていた。過去と同じことをやっていれば同じ結果になると言われていたから…、果たしてこの職場はどうなんだろう、と。でも、生かせるものなら生かしたいというのは正直なところ。他ならない自分が今、潮騒で過去を否定してしまうのではなく、逆に生かさせてもらっている。だから、潮騒スタイルは良い方向だと思う。センター長、自信を持ってください。

栗原 大変なことだろうけど、その分だけ回復へのプログラムを強固にすることにすれば、何度か訪れる困難も乗り切れるのではないかな。今までの経験や人生を棒に振るよりも、潮騒独自の回復プログラムで新しい何かを掴めていけば苦労は乗り切れる。そう私は考えている。理屈はどうであれ、全てを棒に振るよりも現実的で実効可能な判断だと思う。ただ病気の重い人には、これは勧められない。酒飲まないし仕事ができない、というよう重症者には勧められないな。

ハル 現場を任された私としては潮騒独自の店づくりを、これからも頑張つて続けたいという事に尽きる。

栗原 私としては、かま道を市民に利用される店にしたい。潮騒がやっている店だと理解した上で来店してほしい。ここに来れば依存症者がつくった潮騒農場で穫れた野菜を素材に、いろんな健康食メニューが安く食べられる—そのことをもっともっとアピールしたい。まずは、そうした理解を地元を広めたい。そうすれば、もっと支援の輪も広がる。時間はかかるだろうが、地道に口コミでかま道の評判が広がっていけばいい。(終わり)



潮騒JTC10周年 記念フォーラム

みんなの
感想

栗原センター長の「仲間は家族」の講話にみんなが感動!



前号に続き、11月15日に地元の鹿嶋勤労文化会館で開いた「潮騒ジョブトレーニングセンター10周年記念フォーラム」を振り返ります。今回は潮騒JTC入寮者の感想を通じて節目のフォーラムの成果と意義を改めて確認します。当日のプログラムでは、栗原センター長が講話で「私達仲間は一つの家族なんだ!」と力説したことが等しく入寮者の皆さんの心に響いた様子でした。ともすると非日常のフォーラムでは主催者の「よそ行きの顔」が目立ちますが、潮騒フォーラムの主演は当事者であり、まず回復途上の自分たちが舞台を楽しもう、そして潮騒を盛り立ててくれている皆様の日頃の支援に感謝しようという趣旨を貫いています。(み)

ハマ
感想文

タイムキーパーは役不足でも
収穫は大きかった

私は10周年記念フォーラムでタイムキーパーを務めました。講演者の皆さんに持ち時間の残りを手書きしたフリップを示す役割です。簡単そうですが、責任ある任務です。

トークセッションでは普段聞けない仲間たちの話をもっと聞きたくなり、フリップを出すタイミングを逸してしまいました。その結果、午前中のプログラムは30分位タイムオーバーしてしまいました。でも仲間のいい話を聞けてよかったです(笑)。

午後のプログラムは潮騒太鼓連中と鹿島灘太鼓のコラボでスタートし、栗原センター長、近藤恒夫さん、マーシーの話と続き、締めはダルク連合による鹿嶋琉球太鼓でした。会場を沸かせたトークと笑い、そして感動がありました。以前、琉球太鼓の練習に参加した際に仲間たちが熱心に練習していましたが、その成果が本番で見られ、驚きと感動で目頭が熱くなりました。と言う訳で午後の部も大幅にタイムオーバーしてしまいました。タイムキーパーとしての役割はきちんと果たせなかったけど、個人的には収穫の多い素晴らしいフォーラムでした。(ハマ)

しず
感想文

エイサーの演舞で女性の仲間が
舞台上で輝いた

当日は午前11時ごろに会場入りした私達女性メンバーは、前の方の席に座りました。独特の緊張感に包まれ、私の中には10周年の節目の式典に参加できた嬉しさと、これから「一体何が始まるんだろう?」という思いが交錯しました。普段接していない分、かまどや百寿亭、農業隊リーダーの話に聞き入りました。センター長の「仲間は家族」という言葉、涙を拭いながらのお話には深い感動を覚えました。どんな人でも「仲間の全てを受け入れる」との言葉に、本当に懐の大きな人の元に私達は導かれたんだと改めて実感しました。

午後の和太鼓、エイサーの演舞では、とりわけ女性の仲間が舞台上で輝いて見えました。エイサーの最後の曲では観客を舞台に招き、みんなで舞うという演出があり、私も仲間と上がり一緒に踊りました。フォーラムに参加してくれた客席の母親の目から涙がこぼれているのが見え、無意識に手招きして一緒に舞台上で踊り、私は目を赤くした母を思い切りハグしていました。そのまま時間が止まってくれたら、とも思いました。また、ずっと会いたいと思っていたNABAの方々にも会え、話をすることができました。とても嬉しく、これが愛と優しさにあふれた偉大な力なのだ、と感ずることができました。

一日中座らず、来賓の方々の話を直立のまま聞いていたセンター長の姿にも深い感銘を受け、その真っ直ぐな背中

潮騒JTC 10周年 記念フォーラム

みんなの感想

を見ながら、この人に付いていこうと改めて思いました。心が温かくなった素晴らしいフォーラムの一日でした。(しず)

ヒトシ
感想文センター長の涙の発言の中に
苦労が垣間見えた

10周年という節目に立ち会えた感動をフォーラムで仲間と共有できました。みんなで築いてきた潮騒(前史も含め)10年の歴史を実感でき、その困難な前史をつくった栗原センター長やルミさんの「今日一日」の歩みに思いを馳せました。とりわけセンター長の涙の発言の中に、孤立無援の中で悪戦苦闘してきた苦労が垣間見えました。施設を独立させたものの、先の見えない不安や仲間への責任とプレッシャーは相当なもので、それらがセンター長の孤高の背中に浮き彫りになっていました。

私はその背中を追いつける立場でしたが、個人的には潮騒の活動に加わっての感動が一気に込み上げました。名実ともに潮騒に生まれ変わったこの6年間、いろんな経験をさせてもらえた事が自信となり、仲間と居ることの素晴らしさ、居場所が保障されることの重要性、そして自分を変えられた霊的な力を感じ取ることができました。辛く、苦しく、投げたい場面もありましたが、その中でも生きることの「楽しみ」「喜び」を実感しています。今の取り組みが将来に繋がることを信じて、今後も与えられた任務を地道にこなしていこうと思います。自分には大切な節目のフォーラムでした。(ヒトシ)

ツカ
感想文仲間の力を信じて苦労を
乗り越えてきた歩みに感動

フォーラムは4回目の参加で、私にとっても一つの集大成となりました。デイケア施設のまとめ役として気を遣いましたが、感謝と感動のひとつでした。10周年記念ということで、トークセッションの活動報告やステージ上での各発表、和太鼓・エイサーの演舞、近藤さんやマーシーのトークショーなど、とても心に響きました。私はトークセッションではスピーカーの一人となり、尊敬していた亡きリュウジさんの話をしました。彼の背中を見て施設で“育てられた”思い出や、口数の少ないリュウジさんから学んだ事、彼の死と引き換えに受け継いだ役割や仕事を、自分の心の声として語らせてもらいました。

当日の伝達不足などから昼の弁当販売では多少慌てる場面もありましたが、仲間の力によって乗り切れました。

特に感動したのはセンター長の話です。いつもは堂々と話をするのに、この時は言葉につまる場面がありました。私も感極まって涙がこぼれました。センター長は「仲間こそ家族」を力説し、仲間の力を信じて語り尽くせない苦労を乗り越えてきた10周年の歩みが、私の心にもリアルに響きました。私達は「明日は分からない」アディクトです。今後も「今日一日」をモットーに“いい加減(＝丁度よい加減)”の日々を送りたいと思います。(ツカ)

みのる
感想文潮騒の10周年フォーラムは
何もかも感動的だった

私は過去に何度も逮捕され、法務省(＝刑務所)にお勤めしてきました。その頃の生き方は、嫌な事があると気分を変えるためにお酒を飲む、そして飲むと気が大きくなり、支払いは現金一括がお約束になっていました。居酒屋、キャバクラ、ホストに通うお金は、仕事をして稼いでいたので…、と言いたい所ですが、実際はそうはいきません。働いて得た給料は飲み代の軍資金とはならず、スロット代に化け、勝ち続ければ文句はないのですが、負けが込むと生活はできなくなりました。正直、法務省(＝刑務所)に行っていた方が衣食住そろっているのでは楽が出来ると思い込んでいました。だから酒の力を借りて包丁を持ち歩く、そんな生き方しかできない人間になっていました。飲んだくれ、ギャンブラーの生活破たん者でした。

潮騒に繋がったのも、酒さえ飲まなければ衣食住そろっているのでは、法務省よりも環境が良く、タバコが吸える施設ぐらいしか、認識していませんでした。しかし、ここではミーティングがあり、過去の生き方、考え方を考えていかなければなりません。仲間の中で依存症を克服し、回復していくリハビリ施設だからです。いつの間にか私も、プログラムをこなさなければ自分は仲間から追いついて行かれるのではと不安になり、次第に「私も回復していく仲間の中で居たい!」と思うようになりました。動機は何であれ、私も回復したい、施設から逃げるのではなく、自分だって変わりたいんだ、と思うようになりました。

そんな中、10周年フォーラムに女性の仲間たちと参加しました。フォーラムでは女性ハウス施設長のルミさんが正直な気持ちを伝えている姿に胸を打たれました。また栗原センター長は「仲間は家族だ!」と話してくれて、その熱い思いにも感動しました。私は今回、続けることができなかったけど、和太鼓もエイサーも凄い迫力で、その素晴ら

しいパフォーマンスに圧倒されました。もう一度チャンスがあったら、またみんなと一緒にやりたいという思いに駆られました。とにかく10周年フォーラムは何もかも感動的でした。

私はもう、過去のどうしようもない生活破たん者ではなく、回復を目指す潮騒の仲間の一人です。私は今回のフォーラムで、ルミ施設長とセンター長の家族でありたいと感じることができました。それが最大の収穫でした。(みのる)

いるか
感想文

「私達仲間は一つの家族だ」 との話には涙が出た

潮騒ジョブの10周年フォーラム、とても感動しました。農業隊や作業隊の活動やジョブのこれまでの歴史が、とても深いなあと思いました。それにマコトさんやヒトシさんのセンター長に対する熱い思いがとても良かったです。私はいつも思っているんですけど、ルミさんは幸せだなあ、と。二人の息子さんが居て、しっかり施設を支える存在になって、そして存在感のあるセンター長がいて、家族で一つの方向に向かって歩いていく、責任ある仕事を全うしていくことは素敵だなあ、って思います。

センター長が「私達仲間は一つの家族だ!」と話してくれたことには涙が出てしまいました。何よりも楽しみにしていた和太鼓、エイサーも凄く良かったです。エイサーでは、たかこの「女性ちゃんだら」が光りました。とても可愛くて良かったです。また、いつか見れるのかな? 10周年フォーラムは感動ばかりでした。私も来年のフォーラムではエイサーに参加したいです。楽しかったです。ありがとうございました。(いるか)

みく
感想文

みんなの力が一つになった 素晴らしいフォーラム

振り返ると、フォーラムの1週間前からルミ施設長がなんとなくソワソワしていました。「頭の中がフォーラムで“いっぱいいっぱい”なんだな」、と思いました。でも、いざ始まるとそれなりにプログラムの時間が流れ、素敵な演出や思い出深いフォトグラム(光と影の造形美)が随所にちりばめられ、とても素晴らしかったです。特に最後の場面でヒトシさんがセンター長にメッセージを読み上げ、それに対してのセンター長の心温かい深い愛情と思いやりが感動的でした。何よりも「ここに居るみんなが家族なんだ!」という、計り知れない深い無条件の愛情が、本当に私の

心に響きました。

始まる前の「私もこんな仕事やりたくないよ」という施設長の愚痴は本音? だと思います。でも、本心は違っていました。施設長だから、この「るみの家」はもっている、ルミさんの人を見る優しい目、広い大きな心、そして何よりも仲間たちを24時間ケアする夫婦の強い絆、それを支える息子さん、スタッフたち… みんなの力が一つになって実現した素晴らしい節目のフォーラムだったと思います。私は心身ともに、この「るみの家」に身をゆだねて回復に励もうと考えています。本当にブラボー! なフォーラムでした。

栗原センター長の深い精神の在りように 世間は学ぶべき

10周年のフォーラムはとても楽しいものでした。回復の歴史を振り返り、今後に活かそうとする皆さんの思いが、講話やメッセージ、太鼓パフォーマンスからも感じられました。回復と自立を、仲間同士の支え合いと自給自足、医療、介護、社会貢献、役立つ人づく、支え合う人づくりを潮騒は目指しているのです。それがよく分かるフォーラムでした。過去の失敗を忘れるのではなく、それをしっかりと見つめ、それをプラスのパワーに変えて、180度転換しようというプロセスから生まれる、思い、考え、言葉はとても重く私の記憶に残りました。

まさにこの10年は道なき道の、山登りのようなものだったと思います。でも、着実に高みに登っています。今後さらに困難な局面があったとしても潮騒の山登りは続くように思います。栗原センター長の考え方の、考え方とその言葉の重さと強さが、それを示し、灯火となっています。「仲間は家族」「来る者は受け入れ、去る者は追わず」「再び来る者も受け入れる」—この慈愛に満ちた深い精神の在りようの土台にあるものは、「受け入れられない者を受け入れる落ち着きを」(平安の祈り)というダルクの先達から受け継ぐ魂の根源です。

栗原センター長は、両親や家族、友人、そして自分を最後の所で支えていた任侠道の仲間にも見放され、心の危機感を味わいながらも「どん底」で姪の方に救われ、ダルクに救われて今があるというプロセスがあって、はこのような聖なる考え方に達したように思われます。このような精神の在り方は、世の中にそう在るものではありませんし、なかなか実践できるものでもありません。むしろ、この精神は世の中に満ち満ちていれば、私たちはもっと心安らかに、生き生きと生きられるように思います。

(白田美鶴さん(詩人、茨城町在住))

こんなイベントに
参加しました、
というご報告。

今月のイベント参加報告

秋季イベントで潮騒JTCの存在をアピール

／鹿嶋まっりのステージで初めてエイサー演舞／人気の100円焼きそばを短時間で完売

10周年記念フォーラムの準備に追われる多忙化の中で、潮騒JTCは10月から11月にかけて恒例となっている秋季イベントに取り組みました。10月24、25日にカシマススポーツセンターとその周辺で開かれた「第25回鹿嶋まつり(鹿嶋市市制施行20周年記念)」では、前年と同様に地元への感謝を込めて焼きそば1パックを100円の破格値で販売し、1500食を短時間で完売しました。また、初めて模擬店を出店した「百寿亭」も唐揚げやモツ煮が人気でした。ステージ発表では市社会福祉協議会の尽力で、これまで実現しなかった潮騒琉球太鼓の演舞を行うことができました。「福祉枠」の短い時間帯でしたが、人気のキャラクターショーなどに劣らない迫力ある演舞で、参加した市民に潮騒JTCの存在をアピールできました。

一方、潮騒の活動には欠かせないまちづくり市民センターの「第9回てら祭」は11月7、8日に開かれ、前年よりも少ない人数の担当スタッフが奮闘しました。今回は2日目が、カスミイベント「<私の企画>」応援します!」とダブル・ブッキングしましたが、過密日程にもかかわらず午後のステージでしっかり演舞を行い



鹿嶋まつりに初出店した「百寿亭」は唐揚げやモツ煮が人気に



初挑戦の焼きイモ販売で活躍した農業隊メンバーのナカちゃん

ました。同イベントでも人気の100円焼きそば1200食を完売したほか、潮騒農場で収穫した青パパイアやダイコン、サツマイモなど野菜類も格安で販売、初挑戦の焼きイモ試行販売では準備した100本を売り切りました。今回も室内展示では潮騒農業や作業隊などの活動風景写真などを集めたパネル展示で依存症者の回復活動について、視覚的に理解を深めてもらいました。今回も準備に当たった広報部メンバーの活躍が光りました。

これら秋季イベントの合い間を縫って11月5日には、潮騒JTCが初期から支援と連携を頂いている秋元病院(千葉県鎌ケ谷市)職員チームと我が潮騒JTC入寮者選抜チームによるソフトボールの親善交流試合があり、熱戦の結果27対26の僅差で潮騒が勝利することができました。平均年齢が50歳を超えた即席チームで紅白試合を含め練習時間は3日間ほどでしたが、60代後半のオカさんのリーダーシップが選手達を大いに鼓舞し、守備ではエラーしたフジさんが最後の最後に逆転サヨナラホームランを放ち、見事潮騒チームを勝利に導きました。

このほか施設の話題として、恒例となった下津ナイトケア施設(=NPO法人潮騒JTC本部)前の潮騒フラワーロードへの冬の花植え作業が11月17日、現地でありました。夏の花植えの時には農業隊の助っ人がありましたが、今回はデイケア施設の農業班4人が数日掛けて取り組み、パンジーなどのカラフルな花を花壇に植え付け、可憐な花を咲かせています。以前のように各区間に種類の異なる花を植えるのではなく、同じ花で統一したために美しいと評判を呼んでいます。



小差で潮騒選抜チームが勝利した秋元病院との親善ソフトボール

2015年潮騒農業を振り返って

自然と向き合う意味を体で実感できた1年だった



潮騒農業は、栗原センター長が打ち出している「潮騒依存症村構想」に沿って、就労支援を柱とする自給自足型の自然農業を将来目標に掲げながら、年を重ねることに規模を拡大しています。依存症の回復支援施設の宿命として、プログラム途中でのスリップや併発する病気が重くなった事によるリタイヤなど、戦力だった農業隊メンバーの顔触れが予期しない形で変わったりする難しさや、発展のスピードが速すぎて人的なフォローが追いつかない場面も結構あります。しかし、そこは「いい加減=丁度良い加減」をモットーとする潮騒精神でやっています。

振り返ると今年の潮騒農業は、前年度で助成期間が終了した潮騒ファイザープロジェクトの成果を踏まえ、自力で農業環境を整えてきました。水田農業では耕作依頼を受けて作付面積を大きく増やし、多忙化で手が回らず一部水田で稲刈り時期を逸する失敗もありましたが、ベテランメンバーに頼り切りではなく、個々のメンバーの力量がアップしました。コメ作りでは、目標だった施設での自家消費が1年間にわたりほぼ達成できる見通しとなりました。

猿田農場には作業隊の尽力で念願だったコメ保管庫が完成し、さらに作業場の設置工事を手掛けています。畑作ではジャガイモやサツマイモが安定して収穫できるようになり、今後は自力で完成させたビニール

ハウスを使い、干しイモ作りにチャレンジします。この作業は寒暖差の大きい気候が求められるので、今後寒さが厳しくなるかが鍵です。諸般の事情で商業販売には至りませんが、新たに焼きイモ作りを手掛けるなど、生産から販売まで潮騒農業の6次産業化に向けた取り組みに力を入れます。昨年豊作だった青パパイアは今年は約3割の出来にとどまり、潮騒食堂と連携した多品種の野菜作りも通年での安定供給が課題です。女性施設でも農場を確保して農業プログラムに取り組むようになり、農業隊メンバーが熱心の下支えしました。

今年は自分も含め、農業隊の主要メンバー3人が茨城県立農業大学校で短期研修を受け、農業の基礎を学び、トラクターなど農業機械の運転技術をマスターしたり、自分達でビニールハウスを自力で組み立てたり、地域の祭りイベントへの参加（農場野菜の出荷販売）や裏方の手伝いなど、様々な取り組みをしました。成功も大きければ、失敗も大きかったです。自然と向き合うことの意味を体で学んだ1年でした。“農業”というツール(=道具)を使いながら、仲間達の中で自分の病気の回復に向けたプログラムをさせてもらっている事に感謝です。農業隊リーダーとして、来年は「今何をやるべきか」の優先順位に配慮して年間計画を立て、仲間達を信じて潮騒にしかないオンリーワンの農業を創り上げていきたいです。(ヒトシ)

受刑者からの手紙

期間の長短はあっても、受刑生活の中では自分と向き合うことで自己変革を図れるかが問われますが、今回の手紙の中には、その片鱗が伺えます。今ではダルクのキャッチコピーみたいにミーティングで唱和される平安の祈り、「自分に変えられないものを受け入れる落着きを!」「変えられるものは変えてゆく勇気を!」に通じる世界です。受刑中にこうした高いステージの精神性を手にすることは、以後の施設生活では大いにプラスとなっていくます。

手の届くところに覚醒剤があると心が折れてしまう

栗原先生、ご無沙汰しています。私は社会復帰後、またしても覚醒剤に手を染めてしまい、逮捕されて今に至っております。覚醒剤に手を出して結局は後悔している自分がいます。栗原先生とは社会で一度、携帯電話で話をしましたよね。知り合いの1が連絡先を繋げてくれて…。「後の祭り」になる前にあの時、栗原先生を頼っておけば良かったです。やはり心では止めよう止めようと思っけていても、いざ手の届くところに(覚醒剤)があると心が折れてしまうものですね。依存症とは本当に病気の一種ですね。止めたいのに止められない病気、どうしたら良いのでしょうか。

私自身10代からずうっと覚醒剤をいじってきました。本当に今回の機会を最後に覚醒剤から離れなくては廃人になってしまいますので、栗原先生から良きアドバイスを頂けたら嬉しい限りです。誰が何を言おうが、薬物に関しては己自身の心との戦いだと思いますので、今度こそは覚醒剤を絶ち切りたいと思います。頑張ります。公判を控えておりますが、まず悩む事、そして一つひとつ問題を解決していかなくては駄目ですね。

(千葉県 Y・K)

作業場の手配等を見習いとして任され充実した日々

師走に入り気持ちが落ち着かなくなるのは私だけでしょうか。フジさんから(栗原センター長の)代筆の手紙が届きました。有難い事です。感謝致します。フジさんが復帰してまだ2カ月と知り、驚きました。けれども早い段階で受刑者の力になれるとの英断には頭が下がりますし、そこに潮騒の素晴らしさを感じます。どんな人でも誰かから必要とされる生き方は、凄い事だと私は思います。お互いに出来る事をして助け合いながら、でも決して無理をする事なく、それでいて結果的にプラスの方向に導かれるならとても素晴らしい事です。私も一日も早く皆様の役に立てれば嬉しい限りです。

先日から1つの作業場の手配等を見習いとして任されています。今月中旬頃に現班長が満期出所となるための人事です。不慣れなので物凄く大変ですが、毎日が勉強になる充実した仕事です。自分には有難い限りです。先にシュンさんから頂いた大事なアドバイスを胸に秘め、公平公正に任務を遂行して後ろ指を差されないように職責を務めたいです。潮騒 JTC には当所から繋がる受刑者も居ると思いますが、仮釈での受け入れは可能なのでしょうか?あるいは満期でなら OK なのでしょうか? 私も3年務め残り1年を切りました。仮釈ばかり考えてしまうようでは、刑期を務め上げる受刑生活の意味からすれば本末転倒ですが、未熟なせいかもしれませんが考えてしまいます。フジさんの個人的な見解でも結構ですからアドバイスを頂けたら、と思います。実際、満期まで1年を切った今、私にはまず病気(依存症)を治す事が絶対に不可欠ですが、今後の人生を真剣に考えたいという不安が頭をもたげます。イベント等で多忙な日常だとは思いますが、どうかご配慮の程宜しくお願いします。

(東京都 S・Y)

他に類を見ないセンター長の考えと行動力には脱帽

こちら北海道では朝晩寒くメリヤスの肌を着て過ごしています。自分が寒がりなのもありますが、寒いものは寒いのですから、毎年冬は嫌な気持ちで過ごしています。娑婆にいるときはストーブ全開にして燃やして部屋の温度は夏よりも高いくらいで、外の気温差が激しくてすぐに風邪を引くという馬鹿な生活をしていました。この時期、当地の刑務所では暖房が入らず辛い毎日です。

そんな中ですが私もやっと3類に上がり、初めて菓子を食べられようになりました。いい年をした男が菓子一つで喜んでしまうのも悲しい感じがしますが、堀の中ならではの心象風景といえましょう。ここでは食べ物(とりわけ甘いもの)の

有難味を本当に強く感じます。潮騒通信の受刑者からの手紙にも書いてありましたが、皆さん同じ思いなんだなあ、と読んでいて少し嬉しくなっていました。

ところで送付して頂いている潮騒通信によれば、規模を拡大した潮騒水田では無事に稲刈りも終え、今年も豊作だったようです。騒農場では野菜やサツマイモの収穫を終え、これから加工品作りにも挑戦するとの事。いつもながら栗原センター長の前向きな考えと行動力には脱帽です。他の施設には類を見ない程の頑張りや情熱を感じます。自分も前向きなエネルギーをもらっています。潮騒では秋季イベントが目白押しで多忙の事と思いますが、季節柄体調を崩しやすいこともありますので、どうかご自愛ください。

(北海道 O・R)

しおさい俳壇

12月のお題 **クリスマス**

選者 **桐本石見**

わが俳句人生の歩み・No.24

センター長 **栗原 豊**

前回、刑務所での運動会で囚われの身となっている日頃のストレスを発散しようとして、同じ工場仲間のリレー選手に声援を送った内容が問題にされて懲罰となり、等級を落とされて10日間も独房で座らせられた苦い思い出を書いた。実は刑務所での運動会は外国人が数多く一緒に生活しているので、とても国際色豊かだ。そんじょそらの運動会では見られない異色の光景が展開され、面白味が増す。

前回の続きとなるが、「ボール運び」競技では我がチームのイラン人が、こんな逆転劇を演じた。彼は背が高く(身長1m90cmほど)元来がのんびり屋で、スタートからマイペース。終始どん尻で走ったが、ゴール目前で前を行く者が次々とボールを落とした。お陰で最後までマイペースの走りだったこのイラン人が一位になってしまった。運動会が終わっても、その模様をリアルに再現してくれるブラジル人が居た。しばらくは運動会の話題で毎日みんなを笑わせてくれるから、味気ない受刑生活も飽きない。このブラジル人は大変に絵がうまく、物を見る目がとても正確だった。今でも毎日、絵を描いていた様子を懐かしく思い出す。

このように刑務所では増え続ける外国人が厳しい日本の規則の下で、意外にも個性豊かな受刑生活を送っていた。もちろん日本人の受刑者も増えており、今もこの状況は変わらないのではないかと。それにしても刑務所の過剰収容は当時から悩みの種だった。収容人員の増加で工場が合併したことは前回述べたが、これにより総勢約80人にまで膨れ上がった。120～130%も定員超過で寝起きする部屋も8人でいっぱいなのに9人になった。冬の間は窮屈でも我慢できるが夏場はとても辛い環境になる。でも、これも囚われの身の宿命とも言える。外国のように囚人に対しての人権意識が高ければ処遇改善も可能になるが、この国ではそうはいかない。

それでなくても昨今は新自由主義が幅を利かし、弱い者には容赦なく「自己責任論」が勢いを増すご時世だから、刑務所での声なき声はかき消されていく。それでも当時の私には「此の獄舎(ひとや)なれて住み居る寒の月」と詠んだように、まだ月を賞(め)でる余裕があった。ほかにも当時の作品には「かじかみし手に余(あま)る袖ボタン」「初雪の獄舎(ひとや)豊かに変わりゆく」「愛の文字雫に消える冬の窓」があった。いずれも懐かしい作品だ。(この項つづく)

子と孫と
揃ひタワ一の
聖夜の燈

オノ

今ではタワーも各都市にあります。が、やはりスカイツリーや東京タワーが有名で、クリスマスが近くなると街のイルミネーションと合わせて夜を彩る。子や孫も揃い家族での見物かも、人の幸せは夫々だが平凡にも家族の団欒が何よりと思う句です。

故里へ
帰る夜行の
クリスマス

ツクオ

今でも年末には故郷で正月を迎えるために大混雑しますが、歌謡にもある様に上野駅や大阪発の夜行は思い出が深い。朝になり雪景色の家や里の山などが見えると胸が熱くなったものです。クリスマスには年末とは別のロマンのある句です。

クリスマス
思い出したる
祖父の髭

イチ

日本のクリスマスは一五五二年に現山口市でミサが行われた後江戸幕府の禁止令で中断、明治三十三年明治屋が銀座に聖堂など売り出し商戦的なクリスマスになった。クリスマスになるとサンタに似た祖父の髭を懐かしむ句で、私も髭面の祖父を思い出します。

特選句

特選句

特選句

秀逸句

今月の秀逸句

日本の文化となりし聖菓かな

ユタカ

聖菓はクリスマスケーキのことで明治四三年に不二屋が横浜で売り出し今に至る。日本の菓子は饅頭が主流だが、明治の外国文化奨励で商戦的にも広がる。また日本は神国だが、仏教、キリスト教、各種の祭、行事など多い。少しの諧謔(かいぎやく)ユーモアを込めた句で面白い。

ローソクに聖夜独りの薄明り

ケン

クリスマスの夜は家族が若い人はカップルで過すのが理想だが現実には独りの人も多い。それでもケーキを買いローソクを点して聖夜を迎える。私にもそんな青春時代があったのが懐かしい句で、東京の一室の淋しさも思います。

左手に輝く指輪クリスマス

イシダ

クリスマスプレゼントやサンタの逸話は大型教ニコライ伝説からと言われ、愛を与えることでもある。クリスマスの燈に貫つた指輪が輝く、若い日の思い出のことも、微笑ましく明るい句です。

母子達サンタ姿の吾を待つ

トラ

昔の外国ではサンタの服装も緑、黒、赤などあり、良い子には褒美、悪い子には罰もあったとも。

日本では赤い服のサンタで施設の子等へ有名人が訪れたり、家庭では父や母かも。商戦に連れて今や盛んで平和の証でもある。そのサンタを子達は待つている、今の自分を顧ての切々とした句です。

クリスマス大きな包みに子の笑顔

シズ

日本では外来の行事も多くあり、クリスマスの後は正月、また個人の誕生日、盆、祭りなど子供には楽しいかも。大きな袋のプレゼントに子の笑顔が彷彿する句です。

イルミネーション

二人で見るぞ来年は

スミレ

昔は神戸のが有名であったが、今ではLEDの発達と少し景気も良くなったのか、各地で街や公園を飾る。その夜を散歩するのはやはりカップルが一番良い、幸を祈る句です。

イブの夜は

貴方と居たい何時までも

みく

イブは夜のことでもあり呼吸、生きるの意でもある。若い時はクリスマスに限らず何時までも二人で過したい、それが若さの特権でもあります。寒いクリスマスイブもあるが二人でいると温かい。微笑ましい句で若い日が懐かしい。

佳作

プレゼントチキンとワイン聖夜かな	ワカ	幸せだ仲間と過すクリスマス	みのる
クリスマスイブや下津を散歩する	シゲ	更けてまたイルミネーション綺麗だね	イルカ
潮騒も白赤緑クリスマス	ブ	クリスマス早く欲しいなプレゼント	タカコ
幼な日の母と飾りし星ツリー	モト	サンタさん期待して寝る一夜かな	キン
クリスマス聖歌歌ひし幼き日	マサヤ	クリスマスサンタクロース待ちわびる	みっちゃん
まぼろしのトナカイ駆くる夜の窓	ヒロ	クリスマスサンタが街にやって来る	レイコ
クリスマス何が欲しいか聞く親父	コバ	大家族今は懐かしクリスマス	しま

どっこい私も生きてます～我が回復記～

「マサヤの回復記」

第3回

故郷は自分を温かく迎え入れる場所ではなかった

10周年記念フォーラムへの準備に追われて少し間が空きましたが、やっと「我が回復記」を再開できました。当初の予定では第3回目で潮騒JTCに入寮した当時の体験を書かせて頂こうと考えたのですが、この回復記を休載している間に、私の問題であるアルコール依存症の回復に向けて、無視できない大事な体験となる“ある出来事”がありました。それを3回に分けて書きます。

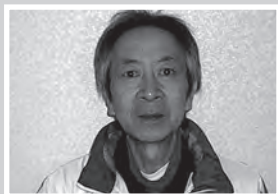
11月7日、その出来事は起きました。この日はカスミグループ主催のイベント「＜私の企画＞応援します！」の前日準備で、私は茨城県つくば市にきていました。翌日のイベント本番は自分が作成した動画作品を初披露する場であり、同時に和太鼓を発表する日でもありました。でも、私の心は準備作業をしながらも複雑に揺れ動いていました。「よーし、やり遂げるぞ!」という気持ちと、それを打ち消す気持ちが絡み合っていたのです。この相反する感情が自分の中に湧き上がったのには理由がありました。このつくば市は、私の生まれ故郷だったのです。会場に向かう車窓に見える懐かしい風景が、自分の中で眠っていた幼い頃の記憶や、楽しかった日々の思い出をよみがえらしました。

このような複雑な感情は健常者には分かりにくいかもしれませんが、アディクト(依存症者)にとって故郷は必ずしも自分を温かく迎え入れてくれる居場所ではないのです。中途半端な形で舞い戻ると「鬼門」として立ちふさがる場所なのです。私にとってつくば市は、家族や親類、友人知人、同僚らを次々に裏切り、社会的な信用や信頼など全てを失って「石持て追われる如く」後にした罪深い過去が張り付いている世界なのです。

なので、つくばの地に足を着いた瞬間から、否定的な過去がよみがえって自分のやる気は打ち砕かれていたのかもしれませんが。そうして、この無言のプレッシャーが私の中でどんどん膨らんでいったのです。うまく説明できないのですが、もはや会場にはいたたまれなくなっって自分の存在を、その場から消したいという衝動に駆られたのです。とても気恥ずかしいのですが、それが結果的に“たった1日の逃避行”となってしまったのです。(次号に続く)

12月のバースデー

カート



長くなりました。日々楽しく。

ヨウイチ



事情により愛車で。。

アベ



今日一日

ひこ



今日一日

えん&まさや



頑張ります。

ていじ



死ぬまで頑張ります。

12月の行事予定

- 10日 潮騒俳句会
 13・14日 JAしおさい鹿嶋農産物直売所感謝祭
 13・19日 秋元病院メッセージ
 20日 潮騒家族会
 23日 潮騒クリスマス会
 24日 百寿亭クリスマス会
 28日 年末恒例潮騒餅つき大会
 29日 各ナイトケア施設の一斉大掃除

1月の行事予定

- 1日(元旦) 息栖神社で太鼓初打ち
 2日 新年入寮者初顔合わせ
 4日 鹿島神宮への初詣で
 10・16日 秋元病院メッセージ
 16日 沖縄ダルク22周年感謝フォーラム
 14日 潮騒俳句会
 24日 潮騒家族会
 31日 潮騒アディクションセミナー

編集後記

先月号は10周年フォーラムの特集記事が盛りだくさんあって、本欄を割愛せざるを得なかった。本欄を埋め草や刺身のつま程度に軽く考えていた訳ではないが、潮騒通信の熱心な女性読者から「毎回、楽しみにしているんですよ」という励ましの言葉を頂いた。その方によれば潮騒通信は隅々まで読みごたえがあり、暇を見つけては何度も読み返すという。そう言えば、受刑者の手紙にも潮騒通信を熟読してくれている方々がいる。この女性は「新聞もそうだけど、肩の力を抜いた小さなコラムには書き手の力量が伺える」というのだ。言葉を浪費するように冗長に流れる記事よりも、コンパクトにまとめた気の利いた記事の方が読者のハートを射抜く力がある。そのことに謙虚に、自覚的であれ、と書き手の原点を教えられたような気がする。この方にとっても申し訳ないと思った。ご指摘は励ましではなく、温かい“お叱り”と受け止めるべきだった。潮騒は、社会的な局所で取り組まれている依存症の回復支援活動だし、潮騒通信だって発行部数はせいぜい1000部、ほとんど反響や手ごたえがない。読者の潮騒に対する見方は、どうせその程度なんだろう…。ともすると、そうしたやくざな気持ちになってしまう自分を大いに恥じた。読者に乞う、ご意見&ご批判。どうか良いお年をお迎えください。(市)

献金・献品を頂いた方 (12月15日現在)

・小岩井商事様 ・宮部 美代子様 ・(株)美光エンタープライズ様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。
 おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

潮騒通信 どっこい生きてます! 2015年12号

Contents

- P② 2015年を振り返って 〜スタッフの成長は来年に繋がる
 P③ おらげのかまどオープン1周年記念対談
 栗原センター長 VS ハル店長
 P⑥ 潮騒JTC10周年記念フォーラム みんなの感想
 P⑧ 今月のイベント参加報告
 秋季イベントで潮騒JTCの存在をアピール
 鹿嶋まつりのステージで初めてエイサー演舞
 人気の100円焼きそばを短時間で完売
 P⑩ 2015年潮騒農業を振り返って
 P⑪ 受刑者からの手紙
 P⑫ しおさい俳壇「クリスマス」
 P⑭ どっこい私も生きてます「マサヤの回復記」第3回

■編集・発行:

特定非営利活動法人
 潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱34号
 〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台210-10
 TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒リカバリーホーム(中施設)
 〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱56号
 〒311-2213 茨城県鹿嶋市中2773-16
 TEL:0299-69-9099 FAX:0299-69-9098

潮騒スリークオーターハウス鉾田
 〒311-2113 茨城県鉾田市上幡木1113-39

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp
 ホームページ <http://shiosaidarc.com/>



